

平成 3年 6月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

大荷田を歩く

大荷田地区は、青梅市の南東端で、多摩川の南岸にある広がる丘陵地です。長淵丘陵とも呼ばれていますが、学術的にはふるくから「草花丘陵」と呼んでいます。

丘陵地のほぼ中央を、西端の旧二ツ塚峠（標高 358 メートル）から東の方向へ、大荷田川が流れています。大荷田川の流域面積は約 2 平方キロメートルで、中流部には「大荷田」の集落があり、集落の西端付近には、大慢神社と称されていました。明治維新の時に大慢神社と改称されています。例祭は、かつては 9 月 19 日でしたが、最近では 19 日に近い日曜日で、宮司は鹿島玉川神社の玉川氏です。

柱幅約 1.8 メートルの神明型の鳥居をくぐって境内に入ると雑木林の中に約 1.5 メートルの参道が続き、途中には二本の石灯籠が建てられています。いずれも高さは約 1.75 メートルで正面には「常夜燈」と刻まれ、また側面には「武州多摩郡上長淵村」と記されています。銘文によると左側のものは天保七丙申年（1836）、右側のものは文化五戊辰年（1808）に建てられたようです。

石灯籠の先の左側には、小さな手洗盤が置かれています。台石の上に乗る手洗盤は、石灰岩製で長さ約 110 センチ、幅約 105 センチ、厚さ約 35 センチの大きさで、珍しい形をしています。まるで巨大な鬼が尻餅をついた際、地面につけた手形のような形をしており、右手の五本の指跡や手のひらのような窪みがついています。

近くに住む並木フクさん（明治 41 年生まれ）によると、この珍しい形をした石灰岩はその昔、並木さんの御先祖が大きな草屋根の台所の地下から掘り出したものだそうです。珍しい形をしていたので、安政二年（1855）九月に村人たちが協力して神社まで運び、手洗盤として奉納したとのことでした。

ところで、草花丘陵の地質は、秩父古生層と呼ばれる砂岩や頁岩の上に乗る「大荷田礫層^{れき}」です。大荷田礫層は、所々に砂層や粘土層を挟んでいますが、ほとんどは直径数センチから直径 1 メートル以上もある礫から構成されています。これらの礫は、今から 100 万年前から 150 万年も前に当時の多摩川が奥多摩から運び出して来て当時の東京湾の河口付近であった所に堆積させたものです。ですから、大荷田礫層の礫の種類は奥多摩の地質を反映し、砂岩、頁岩、チャート、石灰岩、ホーンブレンドから成っています。

(文責 角田清美)